

## 平曲譜本の濁点注記：尾崎家本平家正節と青洲文庫本平家正節

著者	奥村 和子
引用	言語文化学研究. 日本語日本文学編. 2010, 5, p.1-12
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00002599">http://doi.org/10.24729/00002599</a>

# 平曲譜本の濁点注記

—尾崎家本平家正節と青洲文庫本平家正節—

奥 村 和 子

言語文化学研究（日本語日本文学編）

2010・3 第5号抜刷

大阪府立大学人間社会学部 言語文化学科

# 平曲譜本の濁点注記

## —尾崎家本平家正節と青洲文庫本平家正節—

奥村和子

### 1. はじめに

いわゆる平曲譜本の国語史料としての価値は、その墨譜に中世期末～近世期京都アクセントが反映していることに重きが置かれるが、豊富な発音注記も劣らず貴重である。中でも「スム」注記は、濁点がすべての濁音に付されているわけではない中で、清音を積極的に表わすという意味で注目され、『平曲譜本の研究』<sup>1</sup>等でその詳細な調査が行われている。結果、その注記は数多い清音のうち、「むしろ当時は濁って読むことの多い場合にあって付された」と解釈される。一方で、濁音を積極的に表わす注記である濁点については、その付され方についての調査があまりない。むしろ、濁点が付されれば濁音で発音されたと判定できるのであるから当時の音韻を知る上で貴重であることは確かで、『日本古典文学大系 平家物語』解説には「平曲の譜本たとえば『平家正節』の濁点の価値は大きい。(略)本文の清濁は、正節によって清濁を決定することが多かった」とあり、下巻末の「平家読み方一覧」等もこれによるところが多いとされる。しかしながらすべての濁音に濁点が付くわけではなく、その付され方の基準については、濁点の数の多さゆえにか詳細な調査はなされていないのである。仮名ばかりでなく漢字、それも音訓問わずに濁点が付される点も含めて、その注記について整理しておくことは必要であろう。

また、本文や墨譜がほぼ同じである『尾崎家本平家正節』(以下、『尾崎本』)と『青洲文庫本平家正節』(以下、『青洲本』)とには、しかし、発音注記にかなりの相違が見られる。濁点も同様で、一見するだけで青洲文庫本の濁点が尾崎本のそれよりも圧倒的に多いことが見て取れる。とすれば両本の間には濁音注記の付され方にも違いがあると考えられ、先後関係の論じられる<sup>2</sup>両本について、注記の特徴を明らかにしておくことは意味のあることと思われる。以下、平曲譜本の濁点について整理とその報告を行う。

### 2. 調査

尾崎本と青洲本において、それぞれの巻一上下の本文に付された濁点をすべて

抜き出し、その濁点の付された文字が「漢字」「振り仮名（捨て仮名を含む）」「仮名」のいずれであるかによって分類すると、次のようである。

	仮名	振り仮名	漢字	合計
尾 崎 本	704	25	175	904
青 洲 本	836	304	524	1664

やはり青洲本の濁点の多さが、特に振り仮名と漢字において目立つ。次章において、その付され方を順に見ていくこととする。

### 3. 結果と分析

#### 3-1. 仮名に付された濁点

尾崎本、青洲本ともに最も多いのが仮名に付された濁点であって、濁音と思われる仮名の大部分に付いている。試しに、巻一上から逆に「濁音で発音されたとと思われる箇所に濁点が付いていない」例を拾い上げると、次のようである<sup>3</sup>。

尾崎本 144例（助詞79例、助動詞18例、動詞28（うち語尾13）例ほか）

※ 助詞79例の内訳は「ば」62例、「まで」4例、「が」「をば」各3例、「ども」2例、「て（動詞音便形の下で濁ると考えられる箇所）」「で」「ぞ」「だに」「など」各1例

青洲本 8例（助詞2例、助動詞2例、動詞語尾3例、形容動詞1例）

##### 3-1-1. 尾崎本

尾崎本には、濁点の付かない仮名が多く見られる。その用例の多くが助詞・助動詞であることは、平仮名で表記される機会の多さからして当然であろうが、助詞79例中「ば」の用例が62例にのぼることは特徴といえよう。「ば」「が」「ぞ」「で」「ども」といった、濁音か否かで意味が異なる助詞は、むしろ気をつけるべき箇所として積極的に濁点が付されていておかしくない。しかしながら、「が」と「か」のように同じ形の動詞に接続し得る助詞に比べると、もっぱら動詞未然形・已然形に接続する「ば」と動詞以外を受けることも多い（受けたとしても活用形は異なる）「は」の場合、濁点に頼らずとも判断は容易く、そういった点が濁点の少なさにつながっているとも考えられる。なお、助詞「が」と思われる場合に濁点が付いていない例は次のようであって、①③については比較的「が」であることが判断しやすい例と言えそうではある。

①上らんかため (35c・無文沙汰)<sup>4</sup>

②主の女房の、院の御所にさぶらわせ給ふか、此などやうやうに (51d・紅葉)

③今は御装束かあらばこそ (52a・紅葉)

その他、「をば」「いかが」「及んで」のように、もともと助詞「は」「か」「て」であったものが濁って「ば」「が」「で」になったとされる語に濁点がない場合、連濁前の形としての清音が考えられなくもない。しかしながら、それぞれに濁点の付く用例も多く、そのような積極的な意図はないであろう。

### 3-1-2. 青洲本

一方、青洲本においては濁音を表わすと思われる箇所<sup>5</sup>に濁点の付いていない例が8例しか見られない。大系本の清濁決定に関する事情を考慮に入れる必要はあるが、それでも青洲本では基本的に濁音の仮名には濁点を付けるものと考えて良さそうである。尾崎本とは異なり、濁点の付かない語に偏りはなく、「ば」「ぞ」「ず」「ざり」「おぼろけ」「論じ」「漕ぎ」「及び」それぞれ1例ずつである。

④何国よりの月影そや (54p・鱸四)

⑤おほろけにてはいはじとぞ (54p・鱸五)

⑥国を治め、道を論じ、(56p・鱸十一) (論に「ン」の捨て仮名あり)

⑦人の舟ども皆こきもどされて (69p・厳島還御七)

⑧それへは御幸もあらず。(70p・厳島還御十)

⑨叶はさりしによつて (73p・厳島還御二十二)

⑩流罪にも及ひ我身もいかなる逆鱗にか預からんずらんと (81p・紅葉八)

⑪されは其等には誰がをしへけるぞや (81p・紅葉十)

### 3-2. 振り仮名に付された濁点

「2. 調査」で示した如く尾崎本に比して青洲本では極端に多いが、これは漢字の振り仮名そのものが青洲本に多いことを示す。これに対して、濁音と思われる振り仮名に濁点が付いていない例は青洲本で2例「文字モシ (62p・卒都婆流十八)」「曙アケホノ (75p・月見三)」のみ、尾崎本には見当たらず、読みを記す目的で付された振り仮名には原則として濁点を付けると言えそうである。

### 3-3. 漢字に付された濁点 (音読みの場合)

漢字に付された濁点は、振り仮名ほどではないにせよ青洲本と尾崎本とで濁点の数の差が大きく、青洲本に多く見られる。漢字に濁点が付くこと自体は、濁点

成立の経緯からして不思議ではないが、読みの音訓を問わず付けられている点は注目され、漢字に隠れてわかりづらい連濁の様相をうかがい知ることのできる貴重な資料といえる。

### 3-3-1. 尾崎本

尾崎本の音読みの漢字について、A濁点の付いている漢字、B濁音と思われる箇所には濁点のない漢字を次に挙げる。A Bに共通する漢字には\*印を付けた。具体的な用例については文末にまとめて示す。

#### A 音読み・濁点有

【語頭】害、具\*、御\*、侍、自、正\*、成、常、尋、仁、大\*、内、第\*

【語中】賀、具、宮\*、下\*、弦、護、業、幸、国、際、参、三、氏\*、子、司、士、時、者、衆、従\*、女、生、上\*、声、賞、常、定、進\*、人\*、舌、曹、千、大\*、提、壇、地、中\*、弟、敵、殿\*、度\*、藤、徳、馬、拍、万、番、兵、浮、負、覆、物、妙

#### B 音読み・濁点無

【語頭】願、儀、逆、牛、行、供、刑、具\*、下、堯、源、元、後、御\*、五、権、座、字、侍、実、従、十、除、錠、少、上、正\*、甚、随、禅、賊、俗、存、大\*、太、第、地、陣、度、同、導、撥、万、備、琵琶、武、部、舞、奉、仏、別、梵

【語中】楽、月、眼、議、喜、魚、行、卿、吟、宮\*、下\*、元、現、言、後、五、御、向、幸\*、号、獄、座、侍、寺、字、氏、事、歳、在、罪、慙、旨、車、邪、寿、手、守、受、集、十、蹤、従\*、所、相、情、上\*、城、正、條、政、昌、塵、進\*、深、臣、人\*、神、身、泉、前、籍、蔵、束、族、陀、大\*、代、濁、達、治、中\*、杖、殿\*、天、土、度\*、等、々(度)、道、廿、波、婆、奉、聞、返、房、本、部、母

まず、A「濁点有」の特徴として

○語頭に付く例は語中の例に比べて少ない。

○語頭で濁点の付く漢字は清濁両方の読みを持つものがほとんどである。

○語中では、清濁両方の読みを持つものに加えて、清音のみの読みの漢字が増える。

などが挙げられる。

語頭の例については、「大将(タイシャウ・ダイシャウ)」「内(ナイ・ダイ)」「御(ゴ・ギョ・お・おん)」等のように清濁両方の読みを持つ漢字が異なり語数、延べ語数ともにおよそ9割を占め、そのうちのいずれの読みかを示すための濁点

と考えられる。そして普通清音にしか読まない「正（ジャウ・セイ）」については「正三位（ジャウザンミ）」と読ませるための濁点は必要なものであったろう。

語中の場合には清濁両方の読みを持つ漢字が6割弱、清音のみの読みを持つ漢字が4割ほどになる。すなわち、語頭同様、清濁いずれの読みを選択するかを示す役割に加え、「院参」「皇子」「昇進」「当千」「日本国」のように連濁標示としての役割がかなり増えるわけである。もともと濁音のみと考えられる漢字は見あたらない。

一方、B「濁点無」の語には、元号・日付の表記（「平治」「保元」「四月」「十月」「十一日」等）、官職・立場（「太政大臣」「太政官」「太納言」「入道」「女房」等）、地名（「宇治」「丹波」「筑後」「備前」等）といった用語が目立つ（文末資料参照）。

### 3-3-2. 青洲本

#### A 音読み・濁点有

【語頭】峨、害、月、行、刑、具、供、下\*、御、讒、侍、地、上\*、少、正、尋、仁、陣、禪\*、存、大\*、太、壇、度、同、導、万、弁、奉、梵

【語中】賀、害、古、号、議\*、騎、魚、願、眼、喜、行、幸、卿\*、吟、具、宮、下、弦、言\*、御、護、業、幸、国、座、際、歳、罪、才、在、三、参、山、氏\*、子、司、土、時、字\*、事、旨、寺、者、車、守、手\*、衆、蹤、従、所、女、政、上、声、正、昌、生、常、城、定、身、臣、神\*、人、情、籍、舌、千、前\*、然、曹、族、陀、第、代、太、大、達\*、壇、地、中、弟、敵、天、殿、土、度\*、々（茫）、藤、道\*、等、当、徳、特、馬、拍、万、番、非、平、兵、浮、負、奉、夫、覆、物、聞、返、弁、部、妙、母、法、房\*、本\*、茫

#### B 音読み・濁点無

【語頭】願、儀、下\*、堯、源、元、権、五、実、十、上\*、禪、賊、大\*、第、備、舞、琵琶、武、仏、別

【語中】楽、月、議\*、卿\*、現、言\*、元、後、五、字\*、氏\*、手\*、受、集、十、条、神\*、前\*、達\*、治、度\*、道\*、廿、波、婆、房\*、本\*

青洲本においても、A「濁点有」の例には語頭・語中とも尾崎本で示したものと同様の傾向が見られるが、尾崎本ほどはっきりした傾向にはなっていない。清音で読む余地のあまりない漢字に濁点の付く用例も見られ（「峨」「願」「議」「言」「業」など）、濁点の用例が増えると同時にその付け方の基準もやや曖昧になっていると言えるかもしれない。

B「濁点無」については用例がかなり少なく、またその用例の大部分を年号、日付（「安元」「平治」「保元」「十二月」「十五日」）、官職・立場（「大納言」「中納言」「公卿」「入道」「女房」）、地名（「宇治」「越前」「丹波」「筑後」「備前」「備後」）等の用語が占める。これは先の尾崎本の傾向とほぼ一致するわけだが、青洲本の場合はこれらの用語にも濁点が付される場合があり（故にABに共通する漢字が多い）、巻の最初で濁点を付し、その後省略する、ということが行われているようである。章段「月見」における「女房」という語について言えば、初出（月見十一）のみ濁点を付し、以降のもの（月見十一、十二、十二、十四、十七…）には付さない、といった具合である。

### 3-4. 漢字に付された濁点（訓読みの場合）

#### 3-4-1. 尾崎本

##### A 訓読み・濁点有（語頭の例ナシ）

【語中1<sup>5</sup>】垣（かき）\*、方（かた）\*、河（かは）、顔（かほ）、神（かみ）、際（きは）、切（きり）、轡（くつわ）、苦（くるし）、暮（くれ）、紅（くれなゐ）、心（こころ）、越（こし）、比（ころ）、候（さうらふ）、白（しろ）、田（た）、嶽（たけ）、津（つ）、月（つき）\*、手（て）、戸（と）\*、所（ところ）\*、殿（との）\*、共（とも）\*、鳥（とり）、葉（は）\*、端（はし）、原（はら）、総（ふさ）、船（ふね）\*、細（ほそし）、々（しま、ひと）

【語中2】足柄（あしがら）、侍（さぶらふ）\*、辺（べ）\*

##### B 訓読み・濁点無

【語頭】実（げに）<sup>6</sup>

【語中1】垣（かき）\*、方（かた）\*、語（かたり）、通（かよふ）、鳥（からす）、衣（きぬ）、気（け）、事（こと）、嶋（しま）、達（たち）、立（たち）、茅（ち）、月（つき）\*、付（つく）、伝（つたふ）、戸（と）\*、所（ところ）\*、殿（との）\*、共（とも）\*、葉（は）\*、羽（は）、人（ひと）、伏（ふし）、船（ふね）\*、振（ふる）、々（こゑ、ところ、ひと）

【語中2】上（あがる、あげる）、曙（あけぼの）、遊（あそぶ）、扇（あふぎ）、出（い出す、だす、いでる、でる）、何（いづれ）、未（いまだ）、奪（うばふ）枝（えだ）、大臣（おとど）、驚（おどろき）、同（おなじき）、思（おぼす）、覚（おぼゆ）、蒙（かうぶり）、楓（かへで）、景（かげ）、数（かず）、春日（かすが）、風（かぜ）、忝（かたじけなし）、奸（かだまし）、首（かうべ）、刻（きざむ）、築



(きづく)、件(くだん)、屑(くづ)、首(くび)、蔵人(くらうど)、煙(けぶり)、漕(こぐ)、志(こころざし)、去年(こぞ)、貞(さだ)、定(さだめ、さだ)、侍(さぶらふ)\*、重(しげ)、繁(しげし)、滋(しげし)、随(したがふ)、賤(しづ)、沈(しづむ)、杉(すぎ)、勝(すぐる)、頗(すこぶる)、鱸(すずき)、既(すでに)、都(すべて)、高砂(たかさご)、違(たがふ)、薪(たきぎ)、只(ただ)、忠(ただ)、田鶴(たづ)、尋(たづね)、掌(たなごころ)、路(ち)、告(つぐ)、辻(つじ)、続(つづく)、鼓(つづみ)、具(つぶさ)、局(つぼね)、徒然(つれづれ)、科(とが)、殿(との)、長(ながし)、流(ながす)、詠(ながむ)、半(なかば)、渚(なぎさ)、名残(なごり)、涙(なみだ)、汝(なんぢ)、握(にぎり)、信(のぶ)、述(のぶ)、上・昇(のぼる)、斗(ばかり)、恥(はぢ)、始・初(はじめ)、日来(ひごろ)、東(ひんがし)、藤(ふち)、辺(べ)\*、程(ほど)、施(ほどこす)、孫(まご)、交(まじはり)、先(まづ)、目睡(まどろむ)、帝(みかど)、汀(みぎは)、乱(みだる)、宮人(みやうど)、恵(めぐむ)、目出度(めでたし)、頓(やがて)、宿(やど)、呼(よぶ)、蓬(よもぎ)、終夜(よもすがら)、万(よろづ)、我(わが)、業(わざ)、海神(わだづみ)

まず尾崎本の訓読みの語には、音読みの場合よりも明らかに濁点の付かない用例が多い。

語中1(連濁による後部成素語頭の濁音「たま・がき」等)と語中2(語中にもとから存在する濁音「あがる」等)とを比較すると、濁点が付くのはほとんどが語中1、濁点が付かないのは圧倒的に語中2であって、連濁による濁音に濁点が付きやすく、そうでないものには付きづらいと言えそうである。語中2に濁点が付くのは、「さぶらふ・さうらふ」のように『平家物語』において清音と濁音とで使い分けがある等の特殊な事情の語に限られる<sup>7</sup>。

### 3-4-2. 青洲本

#### A 訓読み・濁点有

##### 【語頭】実(げに)

【語中1】垣(かき)\*、替(かふ)、隠(かくれ)、潟(かた)、方(かた)\*、河(かは)、川(かは)、顔(かほ)、神(かみ)、鳥(からす)、際(きは)、衣(きぬ)、切(きり)、轡(くつわ)、喰(くふ)、暮(くれ)、紅(くれなる)、黒(くろ)、気(け)、心(こころ)、事(こと)、候(さうらふ)、嶋(しま)、白(しろ)、田(た)、嶽(たけ)、津(つ)、月(つき)、付(つく)、伝(つたふ)、綱(つな)、手(て)、戸(と)、所(ところ)、殿(との)、共(とも)、鳥(とり)、葉(は)、

端 (はし)、原 (はら)、人 (ひと)、総 (ふさ)、船 (ふね)\*、細 (ほそし)、々 (こゑ、ところ、ひと)

【語中2】柄 (がら)、侍 (さぶらふ)、名残 (なごり)\*、斗 (ばかり)、辺 (べ)  
B 訓読み・濁点無 (語頭の例ナシ)

【語中1】籬 (かき)\*、方 (かた)\*、語 (かたり)、羽 (は)、舟 (ふね)\*、振 (ふる)、々 (さま、たか)

【語中2】揚 (あぐ)、曙 (あけぼの)、預 (あづかる)、何国 (いづく)、枝 (えだ)、驚 (おどろき)、覚 (おぼゆ)、景 (かげ)、風 (かぜ)、忝 (かたじけなし)、件 (くだん)、蔵人 (くらうど)、煙 (けぶり)、貞 (さだ)、定 (さだむ)、重 (しげ)、随 (したがふ)、賤 (しづ)、頗 (すこぶる)、鱸 (すずき)、既 (すでに)、存 (ぞんじ)、高砂 (たかさご)、尋 (たずね)、唯 (ただ)、忠 (ただ)、掌 (たなごころ)、契 (ちぎり)、続 (つづき)、局 (つぼね)、渚 (なぎさ)、歎 (なげき)、名残 (なごり)\*、汝 (なんぢ)、握 (にぎり)、信 (のぶ)、上 (のぼり)、始・初 (はちめ)、日来 (ひごろ)、東 (ひんがし)、藤 (ふぢ)、程 (ほど)、交 (まじはり)、孫 (まご)、先 (まづ)、迄 (まで)、目睡 (まどろむ)、帝 (みかど)、汀 (みぎは)、乱 (みだる)、目出度 (めでたし)、紅葉 (もみぢ)、頓 (やがて)、終夜 (よもすがら)、我 (わが)

青洲本は尾崎本に比べれば濁点の付く語が多い(「鳥」「衣」「事」「嶋」「人」等は尾崎本で付かず、青洲本で付いている)が、「音読みより濁点の付かない場合が多い」「語中1に比べて語中2には濁点が付かない」「語中2に濁点の付く具体例」等の点では尾崎本と共通する傾向を持つ。

なお、「煙 (けぶり・けむり)」「蒙る (かうぶる・かうむる)」等は清濁両方の読みの可能性があるわけだが、これらは大系本で濁音で読んでいるのに対して譜本には濁点がない。青洲本では「蒙る」に「ム」という捨て仮名があり、「かうむる」と読んでいたと思われる。この点、「禿 (かぶろ・かむろ)」「俯く (うつぶく・うつむく)」などを含めて細かく見る必要があるであろう<sup>8</sup>。

#### 4. おわりに

以上、『尾崎家本平家正節』及び『青洲文庫本平家正節』両本について、その巻一の濁点注記について見てきた結果を簡単にまとめると次のようである。

- 仮名については、両本ともかなりの割合で濁点が付されているが、尾崎本では助詞「ば」に濁点のない例が多く見られる。これに対して、青洲

本ではほとんどの濁音に濁点が付く。

- 振り仮名については、青洲本に振り仮名そのものが多いため数には開きがあるが、両本ともほぼすべての濁音に濁点が付される。
- 漢字に付される濁点も青洲本に多いが、「音読みに多い」「音読みで濁点が付かない語は日付、地名、官職名等がほとんどを占める」「訓読みの場合は音読みに比べて濁点が少ないが、中でも連濁と関係ない場合はほとんど付かない」等の傾向は両本に共通する。ただし、音読みの場合に、尾崎本では語頭の濁音はほぼすべてが「清濁両方の読みの可能性のある漢字」であり、語中の濁音は「清濁両方の読みの可能性のある漢字」と「清音のみの読みの漢字」とでほとんどとなる（すなわち、複数の読みのいずれかを決定する場合か、語中で連濁を示す場合に濁音が付される）のに対して、青洲本ではややその傾向が薄れており、「濁音であれば濁点を付す」という方向に傾いているように思われる。

以上をふまえると、「濁点（略）注記の存在自体を以て、≪それが譜本当時の一般的な語形と異なっていた証拠≫と見る事はできないが、（略）やはり≪他の訓み方もあり得るといふ様な問題語形≫に付されることが多かったと言えよう<sup>9</sup>」との記述におおよそ従うことになるかと思う。今回、調査範囲が巻一にとどまったこと、個別の語についての検討が及ばなかったこと、それぞれの本の書写事情に言及していないことを含め更なる調査考察を次稿に譲り、まずは調査範囲内での傾向の報告としたい。

※文末資料 以下、音読みされる漢字に濁点の付されている語及び付されていない語を、該当漢字の前に○を付す形で示す。

尾崎本

#### A 音読み・濁点有

【語頭】○害、○具す、○御勘当、○御気色、○御定、○御前、○御秘蔵、○御辺、○御覧、○自害、○侍従、○正三位、○成就、○常住、○仁、○尋常、○大音声、○大官司、○大士、○大将、○大弁、○御宝殿、○内裏、○第四

【語中】赤○地、幾千○万、以○下、一○定、一○度、院○参、閻○浮提、閻浮○提、皇○子、鶯○舌、御○曹司、御○大事、怨○敵、鎌倉○中、管○弦、行○幸、兄○弟、金○覆輪、功○徳、軍○兵、化○女、源○氏、勸○賞、源○三、見○物、御宝○殿、今○度、金輪○際、濟○度、志○賀、重○藤、侍○従、社○壇、

從○上、衆○生、宿○業、上○弦、正○三位、昇○進、勝○負、白○拍子、尋○常、神○妙、禪○司、大音○声、大○士、大○宮司、大宮○司、大○番衆、大番○衆、長○者、当○時、当○千、日本○国、富○士、平○三、宝○殿、本○国、本○三位、本○地、名○人、名○馬、召○具す、門○司、物の○具、擁○護、養○子

B 音読み・濁点無

【語頭】○願、○元年、○儀刑、○牛車、○御衣、○行幸、○刑部、○御感、○御寝、○具す、○供奉、○堯、○逆鱗、○下向、○源氏、○五、○五位、○御影向、○御幸、○御在位、○後三條、○御参着、○御邪氣、○五十、○御所、○御成人、○御前、○御即位、○御殿、○御逗留、○御納受、○御辺、○御覽、○御利生、○権、○権現、○座主、○字、○侍従、○十戒、○十歳、○実名、○従一位、○十一月、○十一日、○従下、○十五、○十三日、○従上、○十二月、○錠、○正下、○上日、○少将、○上棟、○除す、○陣、○甚深、○隨身、○禪門、○俗、○賊徒、○存、○第一、○大極殿、○第三、○大将、○太政、○太政官、○太政大臣、○大臣葬、○大納言、○大式、○大明神、○大宰、○地神、○導師、○同塵、○度々、○撥、○万歳、○万端、○備前、○琵琶、○備後、○武王、○舞楽、○奉行、○部衆、○仏陀、○別す、○別当、○梵天

【語中】悪○行、阿○字、安○元、一○條、一○族、一○殿、宇○治、優○婆塞、詠○吟、叡○聞、越○前、延○喜、炎○上、王○城、還○御、吉○事、行○幸、刑○部、禁○獄、公○卿、九○條、九○代、供○奉、公門○所、鷄○人、化○現、国○土、群○集、源○氏、高○座、御影○向、御○在位、後三○條、小○侍○従、御○邪氣、五○十、御成○人、御○前、御納○受、権○現、濟○度、左○大将、三○十、三○所、三○度、三○返、四○月、侍○従、紫宸○殿、四○大、七○月、十一○月、従○下、十○五、従○上、十二○月、修○行、正○月、正○下、烝○相、精○進、装○束、昇○殿、仁○寿○殿、甚○深、隨○身、清○濁、僉○議、宣○旨、千○手、先○蹤、先○達、千○本、僧○正、卒都○婆、大極○殿、太○政、太○政官、太○政○大○臣、大○臣葬、胎○藏、大納○言、大明○神、丹○波、筑○後、地○神、○中、中○宮、中納○言、鎮○守、殿○上、殿○上人、東○宮、徳○大○寺、度○々、同○塵、内○大○臣、二三○十、西八○條、二○十、○廿、二○十六、入○道、女○房、年○号、拝○殿、白○魚、八○月、万○歳、繁○昌、備○前、備○後、兵○杖、舞○楽、奉○行、不○思○議、風○情、仏○陀、平○治、返○事、保○元、法○眼、梵○字、梵○天、明○神、無○慙、文○字、

門○前、龍○眼、龍○神、流○罪、冷○泉、輦○車、六○月、六○十、狼○籍、  
郎○等、老○母、

青洲本

A 音読み・濁点有

【語頭】○害、○峨々、○行幸、○刑部、○具す、○供奉、○下向、○月卿、○御最愛、○御感、○御寝、○御勘当、○御気色、○御定、○御衣、○御幸、○御在位、○御参着、○御所、○御邪気、○御成人、○御前、○御即位、○御殿、○御利生、○御納受、○御不審、○御辺、○御秘蔵、○御辺、○御覧、○讒言、○侍従、○正下、○正三位、○上日、○少将、○上棟、○仁、○陣、○尋常、○禪司、○存ずる、○大音声、○大極殿、○大官司、○大士、○大将、○大将殿、○太政、○大政官、○太政大臣、○大臣、○大納言、○大弐、○太夫、○大弁、○御宝殿、○大菩薩、○大名、○大明神、○太宰、○太宰府、○壇ノ浦、○地神、○導師、○同塵、○度ゞ、○仁徳、○万歳、○万端、○奉行、○弁才、○梵天、○弁慶

【語中】赤○地、悪○行、幾千○万、以○下、一○定、一○族、一○度、院○参、詠○吟、叡○聞、延○喜、遠○山、閻○浮提、往○古、皇○子、王○城、鶯○舌、御○曹司、御○大事、怨○敵、海○道、鎌倉○中、還○御、管○弦、奇○特、起請○法師、吉○事、行○幸、兄○弟、刑○部、公○達、金○覆輪、公○卿、九○代、功○徳、供○奉、軍○兵、化○女、檢○非違使、源○氏、源○三、源○太、見○物、高○座、御勘○当、弘徽○殿、国○土、御○在位、御宿○願、御所○中、御○定、御成○人、御○前、後藤○兵衛、御宝○殿、今○度、金輪○際、濟○度、左○大将、三（さ○ぶ）郎、讒○言、三十一○字、三○所、三○返、志○賀、自○害、重○藤、侍○従、紫宸○殿、四○大、次○第、自○然、社○壇、修○行、宿○業、守○護、正○三位、従○上、衆○生、上○手、昇○殿、勝○負、白○拍子、四郎○兵衛、尋○常、神○妙、随○身、数万○騎、青○山、僉○議、禪○司、千○手、先○蹤、宣○旨、先○生、千○本、僧○正、大音○声、大官○司、大○士、太○政、大○臣、大○番衆、大番○衆、太○夫、大○弁、中○宮、長○者、鎮○守、当○国、殿○上、殿○上人、天水○茫○ゞ、当○時、当○千、徳○大○寺、二十八○部衆、日本○国、女○房、仁○平、年○号、輦○車、拜○殿、白○魚、繁○昌、万○歳、奉○行、富○士、風○情、仏○陀、平○三、返○事、弁○才、宝○殿、茫○々、本○宮、本○国、本○三位、本○地、梵○天、明○神、無○下、名○人、名○馬、召○具す、門○司、物の○具、門○前、夕○部、養○子、

龍○眼、龍○神、流○罪、狼○籍、郎○等、老○母

B 音読み・濁点無

【語頭】○源氏、○権現、○十戒、○十歳、○十一月、○十二月、○十五日、○十一日、○十三日、○大納言、○備前、○備後、○舞楽、○上日、○願、○元年、○儀刑、○堯、○下向、○権、○五、○五十八、○五位、○実名、○禅門、○賊徒、○第一、○第三、○琵琶、○武王、○仏陀、○別す、○別当

【語中】安○元、一○条、宇○治、優○婆塞、越○前、公○卿、九○条、群○集、化○現、源○氏、御○前、権○現、三○條、三○度、四○月、七○月、十一○月、十○五日、十二○月、正○月、僉○議、千○手、先○達、千○本、卒都○婆、大納言、大明○神、丹○波、筑○後、中納言、二三○十、二○十、○廿、入○道、女○房、納○受、八○月、八○條、備○前、備○後、舞○楽、不○思○議、平○治、保○元、明○神、文○字、六○月、六○十

注

<sup>1</sup> 奥村三雄氏『平曲譜本の研究』（桜楓社・昭56）第九章等。

<sup>2</sup> 金田一春彦氏「『平家正節』の祖本」を疑う（『芸能』18-9・昭51-9）に始まる、渥美かをる氏との一連の議論等。

<sup>3</sup> 「濁音で発音されたと思われる箇所」については、一応『日本古典文学大系 平家物語』の振り仮名を参照して拾い上げた。大系本の凡例には「清濁その他発音の決定については、東京大学文学部国語研究室に所蔵される岡正武書写の前田流『平家正節』（すなわち青洲本。岡正武の書写とすることについては異説があるがここでは触れない。…引用者注）によるのがもっとも大きかった」とあり、特に青洲本の参考とするには適切ではないのだが、その上でなお大系本と青洲本とで異なる点を取り上げることに一応の意味があると考えた。このような事情に加え、たとえ同じ語形であっても常に清濁が一致するとは限らず、したがって、この用例（数）はあくまで参考である。

<sup>4</sup> 用例の出典は、尾崎本の場合大学堂書店刊『平家正節』のページ数と位置及び章段名、青洲本の場合三省堂刊『青洲文庫本平家正節』のページ数及び章段名で示す。

<sup>5</sup> 訓読みの【語中1】は「もとは清音で連濁により濁音化したと考えられるもの」、【語中2】は「もとからの濁音」を示す。

<sup>6</sup> 「実（げに）」は「現に」であるとされるが、「実」という漢字の字音ではないことから便宜的に訓読みの項に入れた。

<sup>7</sup> なお、濁点の付く語に「候（さうらふ）」があるが、これは語頭が連濁を起こして「～さうらふ」となるものであって、「侍（さぶらふ）」とは事情が異なる。

<sup>8</sup> マ行音・バ行音の交代と濁点との関係については野口義廣氏「国語史資料としての近松世話物浄瑠璃一濁点・胡麻点等の表記について」（『語文研究』43・昭52-6）等も参照。

<sup>9</sup> 注1 掲出書612p等。